

幼児期における他者の誤った行動に対する理由づけの発達

小 川 絢 子

はじめに

幼児期における心の働きに対する理解の検討は、「心の理論 (theory of mind)」研究と呼ばれる分野において、非常に盛んに行われてきている。標準誤信念課題である予期せぬ移動課題 (Wimmer & Perner, 1983) をはじめ、非常に多くの課題が作成され、様々な観点から子どもの心的状態推論への検討がなされてきた。しかし、従来の多くの研究においては、主人公の行動や信念を二者択一的に予測させる予測質問 (prediction question) または信念質問 (belief question) を実施することで、子どもの「心の理論」の能力を測定しており、主人公がそのような誤った行動をとった原因を理由づけさせる理由づけ質問 (explanation question または justification question) を実施した研究は少ない。

また、理由づけ質問を実施していても、従来の研究の中では、誤った信念課題の予測質問の補助的な役割を果たすものとして使用されている研究 (瓜生, 2007 など) が多く、他者の誤った行動の背後には、誤った信念や誤った信念を持つに到った状況があるという因果的な関連に対する子どもの理解自体に焦点を当てた研究は非常に少ない (Naito & Koyama, 2006)。しかし、近年、Wimmer & Mayringer (1998) や、Wimmer & Gschaidner (2001)、Clements, Rustin, & McCallum (2000)、Perner, Laung, & Kloo (2002) のような欧米の研究や、日本における別府・野村 (2005) や、Naito & Koyama (2006) において、理由づけ質問に焦点を当てた研究が行われるようになってきている。特に、日本の子どもの他者の誤った行動に対する理由づけの内容は、欧米の子どもの理由づけとは異なることが指摘されてきている (東山, 2007; Naito & Koyama, 2006) ため、主人公の誤った行動に対して、誤信念やそれを生じさせるに到った状況を推測するという能力に、日本の研究と欧米の研究で違いがみられるのかを明らかにし、文化差が存在するとすれば、その差がどのように説明できるのかを検討していく必要がある。

従って、本論文では、他者の行動に対する子どもの理由づけに焦点を当てた先行研究をレビューすることによって、日本の研究と欧米の研究における、子どもの理由づけの違いや、その違いの意義を考察し、他者の誤った行動と誤った信念や状況との関連の理解の発達における文化差について、理由づけの内容から検討することを主な目的とする。加えて、理由づけの文化差を説明するために今後どのような研究が必要であるかという方向性を検討することを目的とする。

「心の理論」研究における誤信念課題

近年、幼児期や児童期において、子どもが自分や他者の心の働きをどのように理解するようになるのかに焦点をあてた「心の理論」研究が非常に盛んに行われてきている。「心の理論」とは、

広義には自己や他者への心的帰属 (Premack & Woodruff, 1978) であり、自己や他者の行動を予測したり、説明したりするための、心の働きについての知識や原理のこと (信念、意図、願望、感情など様々な心的状態の推論を含む) である。ただし、狭義には、自分の考えとは異なる他者の誤った考え (誤信念) や行動を推測する能力のことを意味しており、幼児の誤信念理解の能力は、他者の心的状態を質問する課題を使用し、検討されることが多い。

具体的な課題としては、誤信念課題 (false belief task) と呼ばれる Wimmer & Perner (1983) や Hogrefe, Wimmer, & Perner (1986) の課題が挙げられる。この課題では、①登場人物Aがある物を部屋の場所Xに入れて退出、②登場人物Aの不在中に、登場人物Bが部屋に現れ、物を場所Yに移動させ退出する、③再び登場人物Aが部屋に現れる、という不意移動 (unexpected transfer) ストーリーを、人形劇や紙芝居などを用いて呈示した後で、子どもに質問を行う。質問は、予測質問として「登場人物Aは物がどこにあると思っていますか (始めにどこを探しますか) ?」、記憶質問として「登場人物Aが始めに物を入れたのはどこですか?」、現実質問として「今どこに物がありますか?」をたずねる。Wellman, Cross, & Watson (2001) は、「心の理論」課題を使用した178の研究を対象としたメタ分析を行い、様々な課題操作を行った研究において、幼児期の間年齢が上がるにつれて予測質問に対する成績が上がるという一貫した発達変化が見られることを示している。この結果から Wellman et al. (2001) は、3歳から5歳にかけて、心的状態や、そこから推測される人間の行動に関する概念が獲得されるとしている。日本においては、獲得時期に遅れがみられることを指摘する研究も存在する (Naito & Koyama, 2006) が、一般的に3歳から5歳の間に発達が進むことがわかっている (子安・郷式・服部, 2003)。

他者の誤った行動に対する理由づけ質問とその意義

Barstch & Wellman (1989) は、3歳児が誤信念課題の予測質問に誤答するのは、他者の行為と信念や欲求の結びつきを理解できていないからではなく、誤信念課題の予測質問が、「行為者は自身の欲求を満たすことができるような方法で行為するだろう」という、行動と欲求の結びつきから (誤った) 推論をさせやすい質問形式を採用しているのではないかと指摘している。そこで、誤信念課題を発展させ、主人公の誤った行動を子どもに呈示し、なぜ主人公が誤った行動をとったのかを理由づけしてもらおう手続きを作成した。Barstch & Wellman (1989) の課題では、まず子どもに中身が入っていない空のバンドエイドの箱を呈示した。その後、子どもにけがをしたビルという人形が空のバンドエイドの箱を探す誤った行動を見せた。そして子どもに「どうしてビルは空の箱を探したの?」を質問した。その結果、3歳児でも、標準的な誤信念課題において他者の誤った行動を正しく予測できるようになる以前に、他者の誤った行動について正しく理由づけできるようになることを示した。ただし、この結果は、Moses & Flavell (1990) や Wimmer & Mayringer (1998) によって批判されている。なぜならば、Barstch & Wellman (1989) の課題では、子どもが理由づけ質問にうまく答えられない場合、「ビルは何を考えているの?」といったプロンプトを多く与えており、「バンドエイド」という回答を無理に引き出している可能性があったからである。また、このストーリーでは、バンドエイドに対応する別の対象の存在 (バンドエイドの代わりに別の対象がバンドエイドの箱に入っている) がなく、ブロック

を入れたバンドエイドの箱を用いて追試を実施したMoses & Flavell (1990) では、理由づけ質問の方が予測質問よりも容易であるという結果はみられず、Barstch & Wellman (1989) を追証することはできなかった。近年、理由づけ質問を含んだ誤信念課題として、よく用いられているのは、Wimmer & Mayringer (1998) による課題で、上述したような、登場人物の不在中に物（または人）が移動する不意移動ストーリーを使用したものである。Table1にその手続きにおける質問の流れをまとめた。

理由づけ質問の必要性について、木下 (1991) は、標準的な誤信念課題 (Hogrefe et al., 1986) においては、特定の状況設定のもとで、二者択一的に他者の認識内容を問うだけであり、他者の認識内容についての原因を意識化する能力、すなわち他者がある認識内容を持つに到った状況自体をも対象化して捉えられるかどうかを検討されていないことを指摘している。

また、誤信念課題の予測質問と理由づけ質問の関連について、別府・野村 (2005) は、誤信念課題の予測質問に対して、幼児は最初、それ以前の特異な感情経験の中で感じた、独特な身体感覚の導きに従って、瞬時に適応的な判断をしており、その場合「なぜそのように判断するのか」は説明できない状態であると説明している。その後、他者との社会的経験を繰り返す中で、徐々に言語的命題としての信念と行動の関連を見出していくのではないかとしている。従って、子どもの心的状態推論の発達を明らかにする上で、予測質問だけでは測ることのできない子どもの思考や推論プロセスを探る一つの手段として、他者の誤った行動に対する理由づけの発達を検討していくことは、意義のあるテーマであると考えられる。

Table1. 誤信念課題の不意移動ストーリーにおける予測質問および理由づけ質問の流れ

①登場人物Aがある物を部屋の場所Xに入れて退出

②登場人物Aの不在中に、登場人物Bが部屋に現れ、物を場所Yに移動させ退出する

③再び登場人物Aが部屋に現れる

予測質問:「登場人物Aは物がどこにあると思っていますか(始めにどこを探しますか)?」

④登場人物Aが物を見つけるために場所Xを探す

理由づけ質問:「どうして登場人物Aは場所Xを探したんですか?」

記憶質問:「登場人物Aが始めに物を入れたのはどこですか?」

現実質問:「今どこに物がありますか?」

日本と欧米における理由づけ質問の違い

一方、日本においては木下 (1991) によって初めて誤信念課題において理由づけ質問が実施された。木下 (1991) は、Wimmer & Mayringer (1998) 以前にそれとほぼ同様の課題の手続きにより、理由づけ質問を実施している。課題の構造はほぼ同じであるが、記憶質問と現実質問を理由づけの前に実施している点が、欧米の研究における手続きと異なる点である。また、子ども

の理由づけに対する分類方法が、欧米の研究とは少し異なっている。Table2に欧米における子どもの理由づけの分類と、木下（1991）における理由づけの分類カテゴリーをまとめた。

まず、Wimmer & Mayringer（1998）における「他者の心的状態に対する言及」は木下（1991）における「知覚経験との関連」のカテゴリーに相当する。ここに分類されるのは、主人公がポイントとなる事実を知覚していないことに言及した反応や主人公の無知といった知識状態に言及したものである。また、Wimmer & Mayringer（1998）による分類においては、「彼はここ（空の箱）にあると思ったから」といった反応をもこれに含めているが、木下（1991）では「事実の単なる言及」に含めており、なぜ主人公はあると思ったのかが明確にならない以上、正答には分類できないとしている。

次にもう1つの正答パターンとして、「関連したストーリー中の事実に対する言及」は、「主人公の初めの行為との関連」に相当する。ここでは、木下（1991）が「主人公が初めに（現在は空の箱に）しまってしまったから」という初めの行為に言及するもののみを対象としているのに対し、Wimmer & Mayringer（1998）においては、「（主人公は遊びに）行っちゃったから」などの他の関連するストーリーに言及した場合にも正答と判断されている。

Table 2. 主人公の誤った行動の理由づけに対する分類カテゴリー

理由づけの正誤	欧米の研究(Wimmer & Mayringer, 1998ほか)	日本の研究(木下, 1991ほか)	実際の回答例(主人公の欲求状態以外は、木下, 1991に基づく)
正答	心的状態への言及	知覚経験との関連による言及	遊びに行ってお姉さんがそっちに入れるの見てへんし。おつかいに行ったら知らなかったの。
	関連したストーリー中の事実に対する言及	主人公のはじめの行為との関連による言及	自分で青い箱にしまってしまったから。
誤答	主人公の欲求状態に対する言及		女の子は本が欲しかったから。
	対象の現在の場所を言及	事実の単なる記述	だって、お兄さんが間違えて入れちゃった。
	非論理的・了解不可能な回答	主人公の心的状態を誤って想定・非論理的・了解不可能な回答	どこにあるのか忘れてたんや(わかんなくなつたん)。
	無回答	無回答	

誤答の分類として、Wimmer & Mayringer（1998）では、「主人公の欲求状態に対する言及」のカテゴリーが含まれている。回答例にあるように子どもは、対象を見つけたいという主人公の欲求状態について言及し、それを誤った行動に対する理由づけとしている。これに対し木下（1991）は欲求状態カテゴリーを設けていない。その詳細な理由は不明であるが、日本の子どもにおいては主人公の欲求に言及するような理由づけが多く見られなかったため、木下（1991）ではこのカテゴリーが作成されなかった可能性がある。この点については、後にNaito & Koyama（2006）の研究を紹介し、そこで考察していく。次に、「対象の現在の場所」への言及と「無関連な事実への言及」は、木下（1991）の「事実の単なる記述」に相当するものであると考えられる。

このカテゴリーに属する回答の多くは、主人公ではないもう一人の登場人物による対象の移動のみに言及するものと、対象が現在ある場所について言及したものである。「非論理的・了解不可能な回答」のカテゴリーは、Wimmer & Mayringer (1998) においては詳しく考察されていないが、木下 (1991) においては、主人公も対象の実際の位置を知っていたという前提での説明はこのカテゴリーに含まれている。

木下 (1991) の報告によれば、日本の子どもでは、3歳児では正答に分類される理由づけを行う者はおらず、4歳になって初めて「知覚経験との関連」や「主人公の初めの行為との関連」による言及がみられはじめ、4歳と5歳では理由づけの正答人数に有意な差がみられた。また、予測質問との関連については、予測質問には正答できるが、理由づけ質問には正答できない水準と予測質問と理由づけ質問の両方に正答できる水準があり、この順に発達が進むことが示されている。この結果は、Wimmer & Mayringer (1998) と一致するものであり、Barstch & Wellman (1989) の主張とは矛盾するものである。

以上のように、理由づけ質問の正誤を指標とした場合、正しい理由づけが可能になる時期は、日本と欧米ではそれほど違いは無いことが見てとれる。しかし、理由づけを分類するカテゴリーがそもそも日本と欧米では異なっており、正確な内容の比較を実施できていない。それに対し、以下で説明するNaito & Koyama (2006) は欧米の研究と同様の手続きを採用し、分類カテゴリーについても日本と欧米の両研究を参照することで、正確な理由づけ内容の比較を可能にしている。

Naito & Koyama (2006) による日本の幼児を対象とした理由づけの研究

Naito & Koyama (2006) は、日本の子どもと欧米の子どもの理由づけにおける質的な違いを見出すために、日本の6～8歳児を対象にいくつかの予期せぬ移動ストーリーを作成し、予測質問および予測質問の反応に対する理由づけを行った。Naito & Koyama (2006) で用いられたストーリー、および質問は、Wimmer & Mayringer (1998) と類似のものであった。ただし、複数の不意移動ストーリーを使用しており、通常の物の移動の他に、人の移動（主人公の不在中に、別の登場人物が自分の意図により移動するストーリーと、自分の意図無しに移動させられるストーリー）のストーリーも実施された。加えて、他者の誤った行動を見せるのではなく、子どもが行った予測に対して、理由づけをさせている。つまり、もし子どもが予測質問に対して誤答する、すなわち現在対象が入っている場所や、移動した登場人物がいる場所を探すと答えた場合にも、「どうして主人公はその場所を探すのですか？」とそのまま、予測に対する理由づけを求めたのである。一方、Naito & Koyama (2006) の手続きは、予測質問の後すぐに理由づけ質問を実施しており、確認質問の影響を受けていない点で、従来の日本の研究の手続きとは異なり、欧米の研究の手続きと一貫している点である。また、分類カテゴリーについても、木下 (1991) と Wimmer & Mayringer (1998) の両研究を参考にしており、正確な理由づけの内容の比較を可能にしていると考えられる。

Naito & Koyama (2006) の報告によると、日本の子どもにおいては児童期に入っても、ストーリー中の主人公の行動や文脈を手がかりとした回答が多く、主人公の誤った行動の理由として主人公の認識状態や欲求状態に言及する子どもはほとんどみられなかった。加えて、どのストー

り条件においても6歳児よりも8歳児のほうが主人公の認識状態すなわち無知について言及することが少なく、ストーリー中の主人公の最初の行為や、居場所を答える傾向が強くなっていた。Wimmer & Mayringer (1998) においては、誤答ではあるが、主人公の欲求状態に対する理由づけが非常に多いことが示されており、対照的な結果であった。

このような理由づけの内容における、日本と欧米の文化差について、Naito & Koyama (2006) は、日本の子どもはストーリー条件に関係なく、観察可能なストーリー中の事実に関して正しいまたは誤った予測を、非常にシンプルに、概略だけ理由づけしているとし、このような傾向は、日本と欧米の文化や言語の違いにあるとしている。

Nelson, Henseler & Plesa (2000) は、「心の理論」の構築は、各文化での社会的な文脈における社会的な出来事を、親や仲間などと協同して話し合うことによって徐々になされていくものであるとしており、大人が他者の誤った行動について、それをどのように説明するのかによって、子どもが構築する「心の理論」は異なるという可能性が考えられる。日本では、欧米ほど日常生活において心的状態語を頻繁に使用することはないため、子どもが「思う」や「考える」、「知っている」、「知らない」といったことばに親しみがなく、理由づけで認識状態への言及が少なかった原因である可能性はある。

Naito & Koyama (2006) が新たな知見を提供しているといえるのは、理由づけを単に正答・誤答として分析するのではなく、予測質問に対する理由づけにおいて、子どもがストーリー中の登場人物の知覚状態や知識状態といった認識状態に言及しているのか、それともストーリー状況や登場人物の行動といった文脈に言及しているのかどうかという新しい基準によって、日本の子どもと欧米の子どもの心的状態推論プロセスの文化差を検討している点にある。では、日本の子どもは誤った行動に対する理由づけにおいて、主人公の信念ではなくストーリー中の状況や文脈を答えやすいという傾向は、いついかなる場合にも存在するのであろうか。Naito & Koyama (2006) の課題が特にストーリー中の状況や文脈を答えやすいものであったという可能性も検討してみる必要があると考えられる。

まず、複数の不意移動ストーリーを一度に呈示したことが影響を与えたとも考えられる。Naito & Koyama (2006) においては、複数の不意移動ストーリーを作成し、1人の子どもに対して同時に複数のストーリーを呈示し、予測質問、理由づけ質問、確認質問を繰り返している。従って、Naito & Koyama (2006) において、子どもがストーリー中の主人公の行動や文脈に依存した理由づけを行う原因は、同じようなストーリーを繰り返し聞く中で、確認質問が、次のストーリーにおける理由づけ質問の回答に影響したためであるとも考えられる。

次に、物の不意移動ストーリーと人の不意移動ストーリーでは、理由づけの内容が変化する可能性があるということについて検討したい。Naito & Koyama (2006) で使用された人物移動課題のストーリーは、たろうくんという主人公が旅館のゲームコーナーに行っている間に、旅館の仲居さんが掃除をするために、たろうくんの母親が桜の間という部屋からもみじの間という部屋へ移動してしまうというものと、洗濯に使うバケツを探しに物置へ行くと行って、探しに行った母親が、たろうくんの知らないうちに、物置からガレージへ移動しているというものであった。予測質問の後、予測質問の子どもの反応に対する理由づけが尋ねられた。結果は、6歳児よりも8歳児のほうが主人公の認識状態すなわち無知について言及することが少なく、ストーリー中の

主人公の最初の行為や居場所を答える傾向が強くなっていた。

物の移動課題と同様日本と欧米で同じ課題を使用した研究がないため、直接比較はできないが、人の移動を扱った欧米の研究として、Wimmer & Gschaider (2001) では、アイスクリーム屋さんが公園から駅へ移動することを、不在のために知らされなかったピーターという主人公が、公園へ向かう場面を呈示され、子どもは、行為理由づけ質問として「なぜ、アイスクリーム屋さんに会うためにピーターは公園へ行ったんですか?」と、信念理由づけ質問として「なぜピーターはアイスクリーム屋さんがまだ公園にいると思ったのですか?」と尋ねられた。結果、3歳前半児では行為理由づけ質問において、ほとんどの子どもが正しく理由づけることができなかったのに対し、3歳後半児の約半数が、ストーリー状況に基づいた理由づけを行った。また、3歳前半児は主人公の誤った行動や誤った信念と、誤らせるような状況に関連づけた理由づけを行うことが全くなかったのに対し、5歳児では多くの場合、主人公の認識状態に言及し(例えば「ピーターはアイスクリーム屋さんがまだそこにいると思っていた」など)、さらに信念理由づけ質問を実施する前に、誤信念の原因となる状況に言及する(例えば「なぜならピーターは家に帰ってしまっていたから」など)ことが可能であった。以上のことから、3歳後半頃から、主人公の誤った行動は、主人公の誤信念によるものだという関連は理解し、言語化することが可能になるが、主人公の誤信念と主人公が誤信念を持つに到った状況や知覚経験とを関連づけて言及することは、5歳頃まで難しいことが考えられる。このように、日本の子どもと欧米の子どもの理由づけの変化は、人の移動ストーリーにおいても全く異なっていることが示唆される。

また、先行研究を検討すると、日本の子どもは「見ていない—知らない」といった、主人公の認識状態に気づいていないわけではないことがわかる。「見ること」は「知ること」を導く、といった因果的関連について子どもがどのように理解するようになっていくのかについて、まず、「見る—知る」の因果関係について「見ること—知ること」課題を実施したWimmer, Hogrefe, & Perner (1988) の研究では、子どもにある場面を呈示し、他者にはその場面を見せないという状況で、子どもに自分と他者が知っているか否かを尋ねた。その結果、3歳児は自己質問では、正しく「知っている」と答えられるが、他者質問では「知らない」と答えることができなかった。これに対して4歳児は、自己質問、他者質問ともに正しく答えることができた。この結果からWimmer et al. (1988) は、「見ること—知ること」の因果的関係の理解が4歳頃に可能になると結論づけている。

また、この因果的関係を言語化する能力について、齋藤 (2000) は、「知る」ということの意味として①真実(事実についての正しい表象)、②適切な情報へのアクセス、③知識に基づいた行為の成功の3つの側面を用い、それぞれの側面について異なる状態にある2人の登場人物によるストーリーを3~5歳児に呈示し、どちらの人物が対象を知っているのかを判断させ、なぜ知っているのか、または知らないのかという理由を言語報告させた。その結果、適切な情報へのアクセスの側面、すなわち「見る」、「聞く」、「触る」といった知覚経験が「知る」ことを導くと因果的に理由づけできるようになる時期は4歳頃であり、他の側面に先立って言語報告が可能になることが示された。

以上の研究から、子どもが「見ること」と「知ること」の因果的関連を理解し、それに言及できるようになるのは、4歳頃であると考えられる。しかし、誤信念課題の理由づけ質問において、

因果的関連に言及できるようになるのは、5歳頃であり、齋藤（2000）で用いられたような、「登場人物は目をけがして見えない」といった単純なストーリー状況における因果的関連づけと、誤信念課題の不意移動ストーリーにおける因果的関連づけの達成時期には大きな隔りがあるように思われる。このように、言語化が可能になる時期にずれが生じる理由として、誤信念課題の不意移動ストーリーにおいて、主人公の知覚経験には直接言及されることがないため、因果的関連が見つけ出しにくいということが挙げられる。

熊谷（2006）は、誤った信念課題には、過去・現在・未来のつながりを読みとりにくくさせているトリックが存在していることを指摘している。標準的な誤信念課題においては、主人公と対象を移動させる他の登場人物という2人が登場し、それぞれの行動ラインが走っている。従って、ストーリーの途中で、場所Xに入れたという主人公の過去は、場所Yに移したという他の登場人物の過去にすりかわってしまうことが、誤った信念課題が年少の子どもや自閉症児にとって困難な原因の一つであるとしている。この課題に通過するためには、人によって異なる行動ラインを区別して、それぞれのライン上で、過去から現在へ、現在から未来へとストーリーの視点をシフトさせていく必要がある。そのため、予測質問だけでなく理由づけ質問に対しても不在の間の主人公の行動ライン、すなわち知覚経験を意識しにくいために、「見ていない—知らない」といった因果関係を推論することが難しいのではないかと考えられる。同様にWimmer & Gschneider（2001）においても、主人公が見ている、または見ていないといったストーリー状況は、暗黙のうちに進むので、情報源となる状況を理解することは難しいことが指摘されている。

先ほど述べたように、特に日本の子どもが、主人公の認識状態をストーリーの文脈から取り出すという推論の形式に慣れていないとするならば、誤信念課題において、「見る—知る」の因果的関係を理解することはより難しいといえるだろう。

従来の研究の問題点

従来、日本の理由づけ質問を用いた多くの研究では、Naito & Koyama（2006）とは異なり、主人公のはじめの行為に対する理由づけと、主人公の知覚や認識経験との関連から言及される理由づけについて、カテゴリとして区別していても、文化的な違いとして区別して検討していなかった。この2つの理由づけを具体的に比較すると、主人公のはじめの行為に対する理由づけは、ストーリーの一部を構成するものであり、ストーリーを思い出し、その一部について言及すれば正答できるのに対し、主人公の知覚経験や認識経験については、通常のストーリーでは述べられることはなく、ストーリーを振りかえった上で、さらに主人公の知覚、認識経験を推測しなければならないと考えられる。従って、単にストーリーの一部を再生する回答と、ストーリーには出てこない主人公の認識状態を言及した回答については別のもので扱う必要があるのではないかと考えられる。このような理由づけの違いについてこれまで特に区別されていない理由として以下のような原因があるのではないだろうか。

まず、幼児期の子どもの発話能力は依然として未発達な部分が多く、たとえ意識していたとしてもそれをうまくことばで表現できないため、理由づけの違いを厳密に比較検討することに重きをおいてこなかったことが挙げられる。また、理由づけ質問を行うことそれ自体が子どもの心理的負担になる（瓜生，2007）ため、詳細な質問を行ってこなかったこともこれに関係しているで

あろう。理由づけ質問が心理的負担になる理由としては、言語的な負荷が大きいことに加え、直感的に正しく判断できる課題に対して、さらに理由を尋ねることで、自分の理解が違っているのではないかと思わせてしまうことも挙げられる。木下 (1991) や Wimmer & Mayringer (1998) の課題においては、予測質問に正答した子どもに対しては、主人公の行動を見せた際に、「(被験児名) ちゃんの言うとおりであったね」や、誤答した子どもに「予想とは違って、空の箱を探していますね」など、フィードバックを与えているため、必ずしも理由づけを尋ねることが自分の予測が間違いであると誤解するとはいえないと考えられるが、できるだけ子どもの言語的な負荷を減らし、子どもの理由づけの能力を適切に測定できる方法を検討していく必要がある。

次に、従来の研究の多くでは理由づけ質問を尋ねる前に確認質問を行っており、この確認質問を手がかりとして、必然的にストーリーの一部を再生するような、はじめの行為に対する理由づけが増えたのではないかと考えられる。また瓜生 (2007) においては、知識質問として「女の人はボールが本当は今こっちに入っていることを知っているかな？」を、理由づけ質問の前に尋ねており、これを手がかりとして、主人公の知識を答える子どもが存在した可能性は十分にある。従って、理由づけの質の違いを考慮するためには、記憶質問や現実質問などの確認質問を先に実施するのではなく、予測質問の後、主人公の実際の行動を呈示した後すぐに理由づけを質問する手続きが必要であると考えられる。

今後の研究の展望

今後の研究としては、まず日本と欧米で直接比較ができるよう、年齢や課題をそろえた研究をしていく必要があると考えられる。そして、先に述べたような Naito & Koyama (2006) やその他理由づけ研究の問題点を修正したうえで、再度日本の子どもの理由づけの性質について検討していく必要があると考えられる。具体的には、類似したストーリー状況や質問を繰り返し子どもに呈示することによる回答の変化を排除することが必要であろう。セッションを2回に分け、実施の期間をあけるなどして、誤信念ストーリーを繰り返し行うことを避けた上で、それでも認識状態に対する言及が少なく、状況や行動からの理由づけが多いのであれば、それは日本の子どもの特徴であるといえるだろう。

次に、もし Naito & Koyama (2006) の主張が正しいのであれば、何歳頃から、主人公の誤った行動に対して認識状態に言及した理由づけを行うようになるのかを検討していかなければならない。もしくは、日本人は全ての年齢層の傾向として目に見える登場人物の行動やストーリー状況による理由づけが多いのかといったことを検討していかなければならないと考えられる。Nelson et al. (2000) の説明にあったように、大人から子どもへ、言語を通してその文化に特徴的な「心の理論」が受け継がれていくのであれば、日本においては大人でも同様に課題ストーリーの状況や文脈利用した理由づけが行われている可能性がある。この点に関しては、これまで研究はなされていないため、特に検討していく必要があると考えられる。

また、子どもの理由づけ質問への回答がストーリー状況を変化させることによって、正しい理由づけへと変化することや、他者の認識状態に言及するようになるのかといった理由づけの変化の可能性についても検討していく必要があると考えられる。熊谷 (2006) が指摘するように、もし子どもの困難さが、2人の登場人物の行動ラインを追うことの難しさに起因するならば、呈示

するストーリー内容において主人公の行動を明確化することによって、予測だけでなく理由づけにも変化がみられる可能性がある。従って、主人公の知覚経験やその結果としての知識経験をストーリー中に呈示することで、主人公の知覚状態や知識状態といった認識状態の言及が可能になることが予想される。

謝 辞

本論文の作成にあたりご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科の子安増生教授に深く感謝いたします。

文 献

- Barch, K., & Wellman, H. M. (1989). Young children's attribution of actions to beliefs and desires. *Child Development*, **60**, 946-964.
- 別府哲・野村香代 (2005). 高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつのか：「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較. *発達心理学研究*, **16**, 257-264.
- Clemrnts, W. A., Rustin, C. L., & McCallum, S. (2000). Promoting the transition from implicit to explicit understanding: a training study of false belief. *Developmental Science*, **3**, 81-92.
- 東山薫 (2007). "心の理論"の多面性の発達—Wellman & Liu尺度と誤答の分析—. *教育心理学研究*, **55**, 359-369.
- Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. (1986). Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, **57**, 567-582.
- 木下孝司. (2001). 幼児における他者の認識内容の理解—他者の「誤った信念」と「認識内容の変化」の理解を中心に. *教育心理学研究*, **39**, 47-56.
- 子安増生・郷式徹・服部敬子. (2003). 縦割り保育の幼稚園における「心の理論」および関連する能力の縦断的研究. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, **49**, 1-21.
- 熊谷高幸. (2006). *自閉症 私とあなたが成り立つまで*. ミネルヴァ書房.
- Moses, L. J., & Flavell, J. H. (1990). Inferring false beliefs from actions and reactions. *Child Development*, **61**, 929-945.
- Naito, M., & Koyama, (2006). The development of false-belief understanding in Japanese children: Delay and difference? *International Journal of Behavioral Development*, **30**, 290-304.
- Nelson, K., Henseler, S., & Plesa, D. (2000). Entering a community of minds: "Theory of mind" from a feminist standpoint. In P. H. Miller & E. K. Scholnick (Eds.), *Toward a feminist developmental psychology* (pp. 61-83). New York: Routledge.
- Perner, J., Lang, B., & Kloo, D. (2002). Theory of mind and self-control: More than a common problem of inhibition. *Child Development*, **73**, 752-767.
- Premack, D. G. and Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences*, **1**, 515-526.
- 齋藤瑞恵 (2000). 「知っている」ということについての幼児の理解の発達. *発達心理学研究*, **11**, 163-175.
- 瓜生淑子 (2007). 嘘を求められる場面での幼児の反応：誤信念課題との比較から. *発達心理学研究*, **18**, 13-24.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, **72**, 655-684.
- Wimmer, H. & Gschaidner, A. (2001). Children's understanding of belief: Why is it important to understand what happened? In Mitchell, P., & Riggs, K. J. (Ed), *Children's reasoning*

and the mind (pp. 253-265) . .

- Wimmer, H., Hogrefe, G. J., & Perner, J. (1988). Children's understanding of informational access as a source of knowledge. *Child Development*, **59**, 386-396.
- Wimmer, H., & Mayringer, H. (1998). False belief understanding in young children. Explanations do not develop before predictions. *International Journal of Behavioral Development*, **22**, 403- 422.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

(教育認知心理学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Development of Explanation about Others' False Action in Young Children

OGAWA Ayako

The purpose of the present article was to consider children's ability to explain causal relation between others' false action and misleading informational conditions and epistemic states when she or he sees other's false action. Many previous researches about standard false-belief tasks had focused on the children's ability to predict others false action when children are presented misleading informational conditions. In explanation questions, children were required to understand the causal links between misleading informational conditions, epistemic states, and resulting actions.

Previous researches had shown that three year olds failed in justifying others' false action and some four year olds started to link others' false action to epistemic states and misleading informational conditions. Naito & Koyama (2006) had proposed that in Japanese children's explanations, they refer not to the protagonist's belief or desire but primarily to their behaviors, while many Western children refer to protagonist's desire. In this review, I propose that one factor which prevents children from reasoning about the protagonist's false action correctly is the story's complexity, in which two protagonists behave differently in one task setting. Children may have difficulty in tracing the main character's behavior which changes with another protagonist's updating behavior.